

川崎平右衛門と武蔵野新田開発

皆さんは「川崎平右衛門」という人物をご存知だろうか。

川崎平右衛門は、第8代将軍徳川吉宗が行った享保の改革で、江戸南町奉行大岡越前守忠相から幕命を受け、不毛の地だった武蔵野台地の新田開発に力を注いだ人物だ。一面スキが生い茂る武蔵野台地を、農民に生きる希望をもたらす耕作可能な



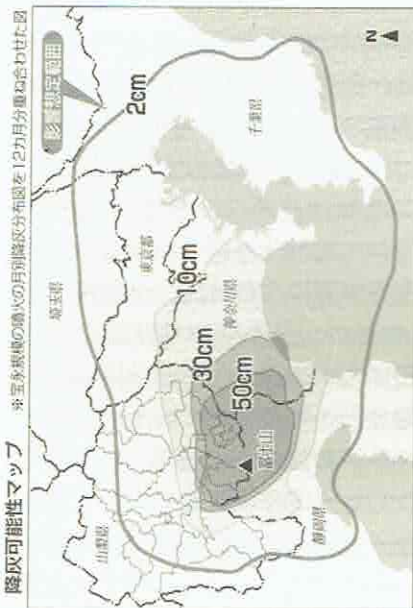
府中市郷土の森博物館に建つ川崎平右衛門の銅像

土地に変貌させたのが平右衛門なのだ。知られざる偉人と言ってもいい。

古来「地震・雷・火事・親父」と言われているように、地震は予測不能であり、最も怖く、しかもその被害は余りにも甚大だ。

去る9月6日未明に発生した北海道胆振東部地震では大規模な土砂崩れや液状化現象が発生し、41名の犠牲者を出した。専門家は「地震活動は連鎖することがあり、巨大地震が発生する可能性もある」という。

南海トラフ沿いの東南海地震は、政府の地震調査研究推進本部の予測によると、2010年1月1日時点での発生確率は、30年以内で60〜70%、50年以内で90%とされている。7年



前の東日本大震災、熊本地震に続き、首都直下地震が起きる可能性は日々増大していると考えるべきだ。

今から311年前、江戸中期の宝永4年10月、関東から紀伊半島、九

州にかけて日本歴史上最大の推定でマグニチュード8.6の東南海地震が発生。地震・津波の甚大な被害は北海道を除く日本全土に及んだ。

この49日後の11月23日、今度は富士山が大噴火を起こす。噴火は16日間も続き、火山灰は関東各地に数センチも降り積もった。大地震に続く富士山噴火で農業は大打撃を受ける。

農家は疲弊し、年貢収入は激減、幕府財政の負債総額は40万両（現在の評価で400億円）にも上った。

幕府は莫大な復興資金を全国の大名家から集めたが、財政赤字の穴埋めや大奥御殿の増築などに流用し、復興のために有効活用しなかった。

このため復興は遅々として進まず、当時100万の人口を擁した江戸で



徳川吉宗は幕府への怨嗟の声を高まっていた。

この緊急時に第8代将軍に就いたのが紀州藩主の徳川吉宗である。

紀州藩も宝永地震で大きな被害を受けたが、吉宗自らが復興の陣頭に立つて荒れた田畑を復興する一方、紀ノ川を利用した灌漑で、新田開発を進めた。この結果、農地は飛躍的に拡大し、巨額の負債を抱えていた紀州藩は見事に復興を成し遂げた。

吉宗は将軍に就任すると、「暴れん坊将軍」の名に恥じず、幕政改革を進めるため、世襲の役人だけに任せることなく、見識と実行力のある人材を積極的に登用した。江戸南町奉行に登用された大岡越前守忠相はその一人だった。

吉宗は自らの経験を生かし、大岡と共に武蔵野台地で大規模な新田開発に乗り出す。現在の東京・杉並区、三鷹、国分寺、さらに小平、清瀬、所沢、人間に及ぶ広大な荒地を

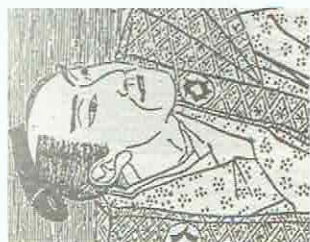
畑にすることが目標だった。

この武蔵野台地は関東ローム層と言われる粘土層で不毛の土地であり、元禄元年の幕府の記録には「開発不能の地で、武蔵野の端々の農士いかに程ありても、さして御用に立たず」と記されている。加えて、富士山の噴火で降り注いだ火山灰によって土地は荒廃の一途を辿っていた。

幕府は新田開発に従事する農民には3年間は生活資金の支給を約束したが、3年後からは年貢を払わねばならない。

新田開発に従事したのは、関東一円から寄せ集められた農民だった。彼らは、収穫が少ない上に、厳しい年貢取立てに苦しみ、逃亡する者が続出した。各地で農民一揆が多発するなど、吉宗と大岡の10年余に及ぶ初期の新田開発は失敗する。

農民の意欲を引き出すのではなく、一方的に幕府が農民を管理し、命令



大岡忠相
という官僚的な手法で
は新田開発を

成功させるのは無理だった。

折悪しくこの頃、長雨と虫害による凶作で大飢饉が発生、1万人以上の餓死者を出し、数百万人が飢饉に苦しんだ。

ここに、川崎平右衛門が登場する。

平右衛門は元禄7年（1694）、府中押立村に生れた。その頃、押立村一帯はしばしば多摩川の洪水に見舞われていた。長じて押立村の名主になった平右衛門は、寛保年間に来た大洪水に際し、40きにも及ぶ多摩川の治水工事を取り仕切った。さらに水害防止のため多摩川沿いに竹を植林するなど、周辺農民の人望を

集めていた。大岡忠相は飢饉に苦しむ人々を救うため、農民たちの信頼を集めていた平右衛門に農民の救済を要請する。

平右衛門は凶作の時に備え、余剰米を米蔵に蓄えていた。平右衛門は大岡忠相に、先ずは私財を擲って、自ら備蓄しておいた米を飢饉に苦しむ農民に配給しようと申し出た。

米俵を積み上げた大八車を小金井橋に向けて送り出した。「お救い米」を配り始めると、大勢の農民たちが集まってきた。平右衛門は飢えに苦しむ農民を励ましつつ、共に新田開発に力を尽くそうと呼びかけた。

この小金井橋における「お救い米」の配給は武蔵野台地の82ヶ村に隣る間に伝わり、農民たちの間には再び生産への意欲が蘇っていった。

この小金井橋での「お救い米」配給の一件は幕府に大きな影響を与えた。幕府は平右衛門の働きを高く評

価し、名字帯刀を許し、武蔵野新田世話役を命じたのだ。

世話役になった平右衛門が始めたのは、農民の生活安定のため、幕府から資金を引き出して、井戸掘りなどの公共事業を行っていたのだ。

その際、大人から赤ん坊に至るまで、仁・義・礼・智・信の5段階に分け、それぞれに給料として、左のように穀物を与えたのだ。

- 仁 〓 鋤取りをする男 麦3升
- 義 〓 モッコを担ぐ女 麦2升
- 礼 〓 モノを運搬する女と子供 1升5合
- 智 〓 子守の女と子供 1升
- 信 〓 赤ん坊 5合

平右衛門は公共事業を行うだけでなく、農民の生活安定に力を注いだのだ。それまでの幕府官僚による上から目線の手法ではなく、共に助け合って生きようという平右衛門の思想・真情が滲み出ている。

百姓自身が協力し合う百姓組合ともいべき取組みを重視した」と述べ、協同の精神を尊重し、百姓の力を引き出した平右衛門を高く評価する。

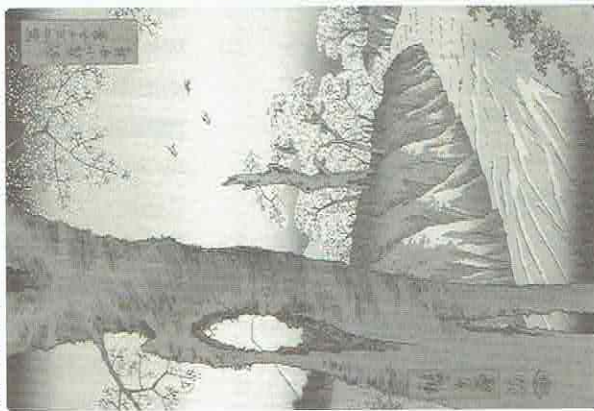
木谷さんも葛谷栄一さんも、川崎平右衛門の存在を知ったのは、小金井市にある劇団現代座の合唱構成劇『武蔵野の歌が聞こえる』であった。

劇団現代座の主宰者である木村快さんは「困難を極めた武蔵野新田の開発は、初期には農民の離散を招き、挫折の危機に直面します。しかし、幕府の要請を受けた

平右衛門は、農民の立場で新田復興を図り、農民自身の助け合い精神を引き出すことによつて、ついに協同の村を完成させたのです」と、『武蔵野の歌が聞こえる』の創作意図を語

っている。春になると玉川上水の小金井橋を中心に約6き、五日市街道沿いに見事な桜が花を咲かせる。この山桜も平右衛門が植えたものだ。

災害大国と言われる日本では毎年のように地震や台風、風水害に見舞われる。国土強靱化が叫ばれる所だが、最も大切なことは国民同士の助け合いの精神であることを、平右衛門の生涯を知って痛感した。(南丘)



歌川広重の富士三十六景・小金井桜の図

猛暑の続く8月下旬、大学時代の先輩である木谷道宣さんら川崎平右衛門顕彰会の方々に、平右衛門ゆかりの地を案内していただいた。

府中市郷土の森博物館には籾米や種が展示されている。これは平右衛門の生家である川崎家が飢饉に備えて蓄えていたものだ。

武蔵野台地の平右衛門ゆかりの地を訪ねると、到る所に彼の功績と人徳を称える石碑が建っている。平右衛門は農民に「力がある者は力を出せ。智恵のある者は智恵を出せ。心優しい者はみんなに優しくしてやれ」と諭していたという。

農的社会的デザイン研究所の葛谷栄一代表は「見ず知らずの人間が集まって作られた新田の村であるからこそ、村人たちは助け合い、百姓たちの話し合いによつて自主的に物事を判断して進めることができるよう、